鳥取大学研究成果リポジトリ
Tottori University research result repository

| | |
|---|---|
| タイトル<br>Title | 「一式飾り」探訪記 : 第14回 「風流」の精神 |
| 著者<br>Auther(s) | Takahashi, Kenji |
| 掲載誌・巻号・ページ<br>Citation | 島根日日新聞 : 5 - 5 |
| 刊行日<br>Issue Date | 2018-08-01 |
| 資源タイプ<br>Resource Type | 論文 / Article |
| 版区分<br>Resource Version | 出版社版 / Publisher |
| 権利<br>Rights | 注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted. |
| DOI | |
| URL | http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/6241 |

# 「一式飾り」探訪記

鳥取大学地域学部准教授　高橋　健司

第14回

## 「風流（ふりゅう）」の精神

これまで、山陰の「一式飾り」とよく似た、北陸や滋賀県の「造り物」・「飾り物」を紹介してきたが、兵庫県丹波市氷上町の成松地区にも、江戸時代から続く「造り物」がある。

２０１２年８月、私は初めて成松を訪ね、「愛宕祭り」で飾られた「造り物」の調査を行った。その際に撮影した写真をご覧いただきたい。宇宙飛行士のような人が宙を漂っている。下には船が見える。よく見ると金属の皿でできた魚も泳いでいる。

これは成松の中町上組の人たちが金物一式で制作した「東日本大震災　３・11後を生きる」という作品である。宇宙飛行士に見えたのはダイバーで、気仙沼の漁師が震災後の海に潜って見た景色を表現している。また、自然が回復する姿を見て、漁師が再び海に生きる決心をしたというエピソードもパネルで紹介している。

この作品を見た時、私はその場から動けなくなった。「東日本大震災」という重いテーマの作品があるとは思いも寄らず、海中を表現するという発想にも驚いた。そして、これだけの材料で深遠な世界が見立てられることに、感動を覚えたのである。

それ以来、毎年学生を連れて成松へ調査に訪れているが、年々「造り物」は規模が大きくなり、おびただしい数の材料が用いられるようになった。昨年8月に飾られた西町区の「国宝彦根城と天秤櫓（てんびんやぐら）」は、なんと2900点もの陶器が用いられ、コンクールで最高賞に輝いた。

今や成松ではコンクールで賞を取るために、各組が作品に用いる材料を大量に購入し、より大きく、より豪華な作品を作るために躍起となっている。

さらに、町おこしに協力している関西大学の学生たちも作品を作って飾るようになり、昨年はプラスチックうちわを2700点も集めて制作した巨大な「火の鳥」が人気を博し、競争は過熱する一方である。

物量を誇る大型の作品は壮観だが、このまま拡大の一途をたどれば、いつか息切れしてしまうのではないかと危惧する。また、材料が豊富になればなるほどリアルで緻密な作品となり、「見立て」の趣向が乏しくなっていく気がする。

芸能研究者の郡司正勝氏は、『見立て』の美学は、日本民族の精神性に発し、呪術をなし、芸術を造り、文学・絵画・演劇・造園などのもろもろに至り、日常生活のゆとりとなり、貧乏だった日本文化の遊びの精神となって、『世界』を成立させている」とする。

また郡司氏は、日本の「見立て」の文化を育んできたのは「風流」の精神であり、「風流」とは金をかけた豪華・華麗なものではなく、貧乏を精神の贅沢さに塗り替えた「貧」の精神であるという。（『郡司正勝刪定集』第6巻から引用・要約）

たとえ十分な材料がなくても、「見立て」で表現してみせるところに、「一式飾り」の真価があるのではないだろうか。「一式飾り」は見た目の豪華さではなく、「見立て」の発想の豊かさを競うべきだと思う。